

開催地名	兵庫県 姫路市
開催日時	令和7年1月15日(水)14:00～15:30
開催場所	姫路市防災センター 多目的ホール
語り部	小寺 昭夫(岡山県倉敷市)
参加者	姫路市役所職員 (50人)
開催経緯	本市では、市内の多くが浸水想定されており、甚大な被害が予想されるが、大規模で広域的な水害被害の経験がなく、実際にどのようなことが起きるのかイメージが難しい課題がある。また、職員も被災経験や災害対応を行ったものが多くなく、危機感が希薄である。そこで被災地からの実体験を交えた講話をしていただき、職員の防災力の向上の参考としたい。
内容	■はじめに 本講演では、倉敷市消防局に所属する小寺氏が、阪神・淡路大震災や平成30年7月の西日本豪雨での経験をもとに、防災の重要性について語った。小寺氏は昭和62年4月に倉敷市消防局へ入局し、長年にわたり消防活動に従事してきた。特に、西日本豪雨の際には玉島消防署真備分署倉敷消防署に配属され、真備町での救助活動に尽力した経験を持つ。現在は水島消防署に勤務し、引き続き地域の防災・救助活動に携わっている。 岡山県は「晴れの国 岡山」として比較的災害の少ない地域とされているが、近年の気象変動により、想定を超える自然災害が発生している。そのため、災害への備えや防災対策の重要性が高まっている。 倉敷市は人口約47万人、面積約356㎢の都市であり、平成17年5月に合併した真備町は、明治以降6回の水害を経験してきた地域である。平成30年の西日本豪雨では、町域の約4分の1が浸水し、大規模な被害を受けた。本講演では、これらの災害対応の歴史をふまえ、実際の災害時の対応や教訓を共有し、参加者の防災意識向上を図ることを目的としている。 ■災害発生時の状況 気象状況 平成30年7月3日から8日にかけて、西日本を中心に線状降水帯が発生し、記録的な豪雨となった。倉敷市では総雨量294.5mmを記録し、観測史上最多の降雨量を観測した。 この豪雨の影響で、高梁川の支流である小田川とその支流3河川が決壊し、広範囲にわたる浸水被害を引き起こした。特に倉敷市真備町では、町域の約4分の1にあたる約12㎢が浸水する深刻な被害が発生した。 被害状況 浸水の深さは最大約5mに達し、多くの建物が屋根まで水没した。人的被害としては死者51名が確認され、そのうち45名(約88%)が65歳以上の高齢者であった。43名は建物内で被災しており、避難の遅れが被害を拡大させた要因と考えられる。 消防活動の概要 災害発生直後、倉敷市消防局では第二次非常配備体制を発令し、全職員を招集して緊急対応を開始した。しかし、真備町での災害対応と並行して、他市のアルミ工場で爆発事故が発生し、消防隊の対応が分散する事態となった。 また、救助活動中には消防職員がボート救助中に流出した障害物によってボートが破損し、極めて厳しい状況下での救助活動を強いられた。このため、応援要請を行い、以下の支援を受けながら救助活動を続行した。 ・自衛隊への派遣要請 ・緊急消防援助隊(愛知県・滋賀県・奈良県) の出動 7月6日から11日にかけては、3,336件もの119番通報が殺到し、消防隊員は救助活動と安全管理を同時に進める必要に迫られた。 ■災害後の対応 消防署の復旧活動 災害発生後、消防署の施設内には大量の泥が堆積し、仮眠室や廊下、各部屋に至るまで泥に覆われる状況となった。屋外では乾いた泥が砂煙となり、復旧作業にも支障をきたした。 また、土砂によって消火栓が埋まり使用できない状態となったため、水槽車を配置し、排水ポンプ車を用いた水抜き作業を実施した。さらに、一部地域では空き巣被害も発生し、避難者の安全を確保するために深夜パトロールを実施した。消防署の復旧完了までの間は、真備保健福祉会館を間借りして業務を継続した。 二次災害の防止 復旧作業と並行して、二次災害の発生を防ぐための対策も実施された。 ・台風接近への対応 台風の影響が懸念されたため、近隣の球場ダッグアウトに消防組織を一時移転し、強風や大雨

	に備えた安全対策を講じた。 ・火災・爆発事故の防止 ○太陽光パネルの通電火災 ○ガス漏れによる火災 これらのリスクに対し、迅速な点検と防火対策を実施した。 ・災害廃棄物の適正管理 被災地では大量の廃棄物が発生し、新たな危険要因とならないよう管理を徹底した。以下のルールを設定し、住民にも周知した。 ○積み上げ高さ5m以下 ○一山の面積200㎡以内 緊急時のメンタルサポート 災害発生から約3週間後、被災した消防職員に対して個別のメンタルサポート面談を実施した。さらに、継続的な支援のため窓口を設置し、職員が心身のケアを受けられる体制を整備した。災害対応に従事した職員の精神的負担を軽減し、長期的な健康維持を図ることが重要な課題として認識された。 ■まとめ 災害対応には「自助」「共助」「公助」の3つの柱が不可欠である。それぞれの役割を理解し、適切に行動することが、命を守るための鍵となる。 自助の重要性 最も大切なのは「自分の命を守ること」であり、避難の判断は自己責任で行う必要がある。少しでも危険を感じたら早めの避難を徹底しなければならない。また、日頃の備えも自助の一環である。 ・非常用持ち出し袋の準備 ・家族との避難計画の確認 ・ハザードマップの活用 共助の体制 大規模災害時には行政の対応が追いつかないことが多く、地域の助け合いが命を守る鍵となる。 ・自主防災組織の活用 ・防災士や自治会との連携 ・近隣住民との助け合い 公助の限界 公助には限界があり、特に大規模災害時には公的機関の人員が不足するため、すべてを行政に頼ることはできない。そのため、「自助・共助」で持ちこたえる準備が不可欠である。本講演では、防災意識の向上と、日頃の備えの重要性が改めて確認された。
開催地より	実災害を体験している語り部の体験談から、改めて当市でも起こりうる災害だと痛感した。今回の講話の内容を活かし、全庁的に防災意識の高揚につなげていきたい。また、危機管理室としては今後の防災活動や出前講座に活かしていきたい。